

熟塾公開講座

亡女の片袖と幽霊たちは今現代人に何を伝えるのか？！

大念佛寺伝来“亡女の片袖”

落語・講談聞き比べと

「片袖」「幽霊の掛軸 12 幅」特別公開

2006年7月9日(日)午後2時～5時

解説：「大念佛寺と亡女の片袖」

融通念佛宗総本山大念佛寺宗務総長 山田隆章 師

講談：「幽霊の片袖」 講談師 旭堂南陽 氏

落語：「片袖」 落語家 林家染雀 氏

三味線：山澤由江 さん・鳴り物：林家市楼 氏

講談：「亀鉦のお家騒動」 講談師 旭堂小南陵 氏

連日報道される殺人事件。死人に口あり、思いあり・・・かつての日本人は幽霊に被害者の無念さを語らせたのではないだろうか。幽霊が怖いかって・・・、幽霊よりも



惨殺したり追い詰めた犯人の方が怖いに決まっている。源氏物語の中では風が通り過ぎていくだけで、人の気持ち自分から離れていくのを感じることができる日本人の豊かな感受性の中にこそ物の怪や幽霊たちは存在し、勧善懲悪の裏返しとしてある種の道德観も規範になっていたはずだ。しかし善悪の籜さえも失った人には幽霊の哀れさなど理解できるはずもなく、凶悪な殺人事件は後を絶たない。

幽霊と向き合う・・・。夏には怪談話をと考えると、小南陵氏が、「大阪で怪談、幽霊といえば、平野の大念佛寺やなあ。江戸時代の講談・落語にも片袖の話は残っているからなあ」とのこと。しかし、四天王寺と同様、大きな大念佛寺の扉をどのように開ければと思っていると小南陵氏からお願いしてみようと声をかけて頂き、一緒にその門を潜った。念ずれば通ず、大念佛寺の扉が開き7月に会場をお借りできることになった。それも、年に数度しか公開していない亡女の片袖に、8月の第四

日曜日しか公開していない12幅の幽霊の掛軸も特別に拝観させて頂くことが出来たのだ。(原田彰子)



解説：「大念佛寺と亡女の片袖」

融通念佛宗総本山大念佛寺宗務総長 山田隆章 師

本日はお暑い中を、融通念佛宗大念佛寺にお集まりいただきまして誠に有難う御座います。熟塾の7月の例会に本山をお選びいただきましてことを大変光栄に思い、皆様方のお越しをお待ちし、歓迎いた



している訳でございます。本日初めてこのお寺に来たという方は、手を上げていただけますか。大半の皆さんが初めてお越しいただいた様でございます。大阪府で木造建造物としては最も大きいお堂でございます、またこのお寺の宗派は、融通念佛宗と申しますが、そのような宗派があったのか、今日始めて知ったという方ちょっと手を上げてください。ほとんどの皆様方が初めてということで、そういう方々とお出会いさせていただいてお話をさせていただきますこと。誠に有難く思っております。

仏教と申しますと、戦前までは**日本仏教 13 宗**がございました。712年に都を奈良においた平城京が作られ、794年に京都に都が移され平安京が作られます間の奈良時代に作られましたのが南都6派と言われまして、華嚴宗、法相宗、律宗、三論宗、成実宗、俱舍宗がございました。その中で今日まで伝わっている宗派は、良弁による東大寺の**華嚴宗**、道昭による薬師寺・興福寺の**法相宗**、鑑真による唐招提寺の**律宗**の三つの宗派です。次に794年に桓武天皇が京都に都を置かれ、源頼朝が1192年に鎌倉幕府を建てるまでの間、平安時代に作られました宗派が、最澄によります**天台宗**、空海によります**真言宗**、良忍(りょうにん)という方が開きました**融通念佛宗**でございます。鎌倉時代になりまして、栄西の**臨濟宗**、法然の**浄土宗**・親鸞の**浄土真宗**・道元の**曹洞宗**・日蓮の**日蓮宗**・一遍の**時宗**と称される鎌倉6宗が開かれ、江戸時代に宇治の黄檗山満福寺で開かれた**黄檗宗**を合わせて日本仏教13宗と申します。その中でも、融通念佛宗は平安時代に作られた6つ目の宗派でありまして、特に国作の宗派でございます。それまでの宗派は中国や朝鮮から伝来したり、中国・唐で勉強されたものを日本に伝えた仏教でしたが、この融通念佛宗は、純粋に国産の宗派でございます。

良忍という人が、平安時代後期の1072年に、今日の愛知県、尾張国知多郡一帯を支配していた藤原氏一族の大豪族であった秦道武(はたのみちたけ)と、熱田神宮大宮司の娘である母との間に長男として生まれました。産声が誰も聞いたことがないほどのたいへん美しい声であったので、両親は幼名を「音徳丸」と名付け大切に育てました。三つ四つの小さい時から、雨上がりに土団子を2つ重ねて土仏を作っては合掌する子供であり、9歳の時には僧侶になりたいと自ら両親に懇願し、12歳

の時に願いが叶って比叡山の良賀という僧侶より得度いただき「光乗坊良仁」という名をいただきますが、この仁が後に忍ぶという「忍」の字に改められていきます。大変勉強熱心で一生懸命勉強されました。当時比叡山には日本全国から三千名の修行僧が集っていたそうですが、21歳の時には「公主職」といまして先生の地位につかれ、指導する立場になられたのですが、平安時代も終わり、武家が勢力を伸ばしはじめ騒然とした時代でした。当時の最高権力であった白河上皇が、この世の中で思い通りにならないものが3つあるとっています。双六の賽の目に、上から下へ流れる鴨川の水に、比叡の山法師であると例えるほど多くの僧兵を抱え武力を拡充し他の宗派を攻め立てたり、神社の神輿を弄んだりして棒弱無人の振る舞いが目にあまるようになり、また貴族に取り入ろうと権力争いの渦中に飛び込むなど、比叡の山は、本来の修行とはかけ離れた場になっていきました。23歳時に、比叡の山を下り、鳥でさえも飛んでこないという叡山の別所であった大原の奥に隠遁され、仏の真髓を知りたいということで来迎院・蓮成院・浄蓮華院等の寺院を建立し、法華経に基づく修行と念仏行に明け暮れ、1日六万遍のお経を唱え、一切経を誦破するなどの修行を重ねられ、声明を究められました。

46歳、1100年5月15日の昼頃に念仏を唱えていたときに、光り輝く阿弥陀様が十体のお弟子様を伴われて雲の切れ目より目の前にお姿を現されて、「あなたの行法はすばらしく、凡人の及ぶところではない。しかしそれでもなお速疾往生(直ちに極楽に往生すること)はむずかしい。だれもが速やかに往生できる方法を教示しよう。」といて、念仏を唱えながら十体のお弟子様と共に雲の間へ姿を消されました。

そのお姿を描いた「十一尊天得如来像」を本堂中央の扉の中におまつりしております。

いちにんいっさいにん

一人一切人

いっさいにんいちにんいちぎょういっさいぎょう

一切人一人一行一切行

いっさいぎょういちぎょうじっかいいちねん

一切行一行十界一念

ゆうづうねんぶつ おくひやくまんべん くどくえんまん

融通念佛億百万遍功德円満」とは、

一人は皆の為に、皆は一人の為にという意味ですが、日本保険協会のパンフレットにも書かれておりましたが、この偈文は“弥蛇の妙偈”とも“仏勅”ともいわれるもので、融通念佛宗の教えの根幹として、平安時代から伝えられております。

一般的には仏教の教えは難しいものですが、この言葉は世界中に訳され、ONE FOR ALL. ALL FOR ONE.ともいわれよく耳にされるかと思いますが、この融通念佛宗の大切な教えでございますことを、本日お越しの皆様方にはご記憶いただければ幸いです。つまり、一と全体とは常に相互の関連の上に成り立つものであり、それは人と人の間はいうまでもなく、人と物、物と物、また念仏の行いと他のあらゆる行いとの間において

も同じことがいえます。それらが融け合い、通じ合っただけで、ものの完成があり、人の世の平和があり幸福があるのです。自分一人の行法だけに閉じこもっては救いがないということであり、自分の修した念仏の功德や自分の行いを広く世の中の人たちに施し、自分もまた世のすべての人たちから功德を受けて生かされているということになり、それが融通念佛ということでもあります。

あるとき鞍馬寺の多聞天王が現れて良忍にいわれるには、「あなたは先に仏の示現を蒙り、融通念佛の直授に預かったのに、どうしてそれを人びとに勧めて苦しみの衆生を救済しないのか」。

このお言葉によって時機が到来したことを知った良忍は、天治元年(1124年)6月9日、初めて集落に出て、念仏勧進の途につきました。上人の名は朝廷に達し、鳥羽上皇は宮中に上人を招いて、融通念佛会を修し、自ら日課百遍の念仏を誓約されました。さらに、上皇はご帰信のしるしに、愛用の鏡を鉦に鑄造して上人に授けられました。これを鏡鉦といい、念仏勧進の道すがらこれを叩いて歩き、代々大切に伝持されてきました。

さらに鳥羽上皇は自ら融通念佛勧進帳(名帳)を製し、帰信者に名を記せしむべく序文を賜わり、ご自身も署名の筆を染められました。

良忍は聖徳太子様を崇拜されており、四天王寺にお参りし読経されておりましたところ、太子様のお告げを夢で見ました。「四天王寺から東南へ行け、そこに朽ち果てた寺がある。そこが平野の地で、日本最初の征夷大將軍、坂上田村麻呂の第二子、坂上広野麻呂の管轄下におかれ、その菩提寺である修楽寺の別院だった香華院という寺である。その寺に行き、教えを広げなさい。」とのお告げを受けました。平野の地名は、生駒山脈に広がる平野であったからという説もありますが、広野麻呂がお住まいだったので平野と謂われる様になったという説が有力であります。その菩提寺である修楽寺が今の杭全神社のあたりにあったそうです。融通念佛会を修したところ、老若男女が詰め掛け、あとを絶ちませんでした。そこで、鳥羽上皇はここを念仏勧進の根本道場と勅され、良忍はこの地に一寺を興しました。1127年に建立され、それ以来本山として他の地に行くことなく、820年間平野の地で続いてきました。

融通念佛を広めることを生涯の仕事として各地に鉦を叩いて歩いた良忍は、1132年2月26日、そのゆかりの地、大原の来迎院で入滅されました。61歳でした。

それから7代目がこのお寺を継いだ時にはお寺はかなり逼塞しており、お寺の宝物などすべて京都の岩清水八幡宮で預かっていただくような有様でしたが、鎌倉時代、1321年七代目に継がれた法明上人のことを中興の祖として、宝物をまたこの平野の地に戻され、良忍の教えを再び世に広ろめられました。

1323年、その法明上人が、難波津、四天王寺さんの西門のあたりからかつては海が広がっていたといわれておりますが、その港から、信者の方々と共に今日の加古川市の今もあります教信寺にお参りにいく途中、尼崎港

のあたりに差し掛かったところ、嵐に巻き込まれ船が木の葉のように大波に呑みこまれ転覆しそうになりました。船頭が「海神はこの船の中にある宝物を欲しがっているに違いない。どうかそのお宝を嵐を鎮める為に、海神に捧げてください！」と叫びました。法明上人はそのお宝が開祖良忍が鳥羽上皇より賜った鏡鉦であることを確信し、歴代大切にしてきた宝物ではあるが、船に乗船している人々の命には換え難いと思い、海に沈めました。すると嵐はうそのように静まり、皆無事に教信寺に着き、一ヶ月ほど巡業された同じように船で難波津へ帰る途中、嵐に遭ったあたりに差し掛かりますと、大きな海亀が頭に鉦をのせて船に近づき、法明上人が受取り寺に戻りました。その話を、後醍醐天皇がお聞きになり、是非見たいということでご覧になり、「この鉦を今日から亀鉦と呼ぶように」とお言葉をいただきました。その亀鉦は今でもこの大念仏寺に伝えられ、管長が代わる度に、一つまたは三つ叩くように伝えられています。今年6月14日に新しい管長が就任され、12年ぶりに鉦を叩かれました。ですから、本日休憩時間に皆さんが食べられる平野名物の亀饅頭は、大念仏寺の亀鉦縁起の中で鉦を法明上人の元に返した海亀を模したお饅頭として、お参りのお土産に昔からあったようでございます。



それから江戸時代に入りまして、1615年には大阪夏の陣で、秀頼、淀君が自害し豊臣家が滅亡。元和元年と年号を改め徳川家が統治する平和な時代

になった頃、家康公の後を継がれました第二代将軍秀忠公の時代ですが1617年元和3年の六月三日、奥州の観音様を信仰しておられた一人の信者がおられました。箱根権現参拝の為に、地獄谷に差し掛かりますと女の人の声がします。「お助け下さい。私は旅の途中にこの谷に落ち命を落としたものですが、成仏できず地獄に落ちたいへん苦しんでおります。主人に頼んで摂津の国に大念仏寺というお寺で私の回向をお願いするよう伝えてください。私の主人は摂津の国の住吉宮の神官をしている松太夫と申します」というのです。亡女からその証拠にと片袖と香合を手渡された巡礼者は摂津の国までやってきて松太夫を探し出し、その品を見せるとそれらは帰らぬ妻のものであると、大念仏寺の第三十七代目の道和尚上人に回向を願い出ました。法要は夜を徹して行われましたところ、明け方紫の雲がたなびきその中に一人の女性の姿が現れました。それが松太夫の妻であり、「成仏できました。有難うございました」とお礼に現れ西の空に消えていかれたそうです。そして、その片袖と香合も今もこの大念仏寺に伝わっており、後程本日は特別に宝物殿でご覧頂きます。その片袖を鑑定いただきましたところ、その布は間違いなく江戸時代初めの頃の片袖で

あるということでございます。

このお寺は、大念仏寺、又の名を亀鉦寺と呼ばれております。最近では、片袖でその話が伝わっているためか、平野の幽霊寺と謂われたり、マスコミの取材を受けたりします。女性の方がお裁縫を習われますと、縁起が悪いので夜に片方の袖だけを付けてから寝てはいけない、付けるなら両袖を付けなさい。と教えられますと思いますが、これはこのお話が全国に伝わった有名な逸話で、夜に片袖だけを付けてはいけないという教えの元になっております。

この後は、お寺に伝わります片袖についての落語・講談をご紹介しますとのこと、どうぞごゆっくりとお楽しみ下さい。本日は長時間、お時間を頂戴しまして誠にありがとうございました。

休憩：大阪府下最大の木造建築の本堂自由見学



(寛永元年 1624 年創業・



福本商店の“亀の饅頭”賞味)

大阪市平野区

平野上町2丁目 9-10

TEL 06-6791-0977

海亀の中身は白餡です@110円



講談：「**幽霊の片袖**」講談師 **旭堂南陽氏**

概要：江戸時代、元和元年大和の刀帯刀を許されている商人の家に雪のように色白で目はぱっちり眉は月のように鼻筋の通ったそれはとてもとても美しい「清」という一人娘がおりました。その娘が急に病の床についたので、高価な薬を買い名医にお金を積んで治療しました

がその甲斐もなく死んでしまいました。両親は人目もはばからず嘆き悲しみ、極楽寺に葬り七日七日の追善供養を行い、四十九日の供養も親戚一同うち揃い懇って弔いました。その夜、十時ごろに極楽寺の扉をドンドン叩く者があります。門番が戸を少しあけると、刀を腰に添えた若侍が立っていたので慌てて門をあけ中にいれます。「この夜更けに何の御用で」と尋ねる門番に若侍は「住職に会ってお願いしたことがあるので伝えてくれるように」といいながら懐に銭を差し入れます。門番が住職に取次ぎ、若侍が座敷に上がると、こんな夜分に失礼つかまつると住職への心づけの大金を差し出し、自分は京都の侍で清という娘と逢瀬を重ね、今夜もまた会えると暫くぶりにやってきたところ、人生とは無常なものであのように若く美しい娘が急に病で亡くなってこの寺に葬られたことを知り、墓を暴いてでも一目なりとももう一度会いたい」と願うのですが、住職は「墓を暴くとは、あなたばかりかこの寺の者も罰せられる大罪、そのようなこととても許しがたい」と断ります。しかし、若侍は涙をハラハラと流し一目会いたいとあまり懇願する姿に心動かされ、住職は「それならば、寺の者が寝静まった後に一目だけ」と告げます。深夜、住職が夜の墓場を案内し遠巻きにその様子を見ておりました。若侍が鍬で墓場の土を掘り進めると、棺桶に当たったので、手探りで釘をあけ蓋を開けたところ死臭があたりに広がりましたが、それも厭わず侍は娘の遺体を抱き上げて、頬ずりをして涙を流して別れを惜しんで静かに蓋をしめ土をかけて墓を元のように戻し、住職の所に戻ってきて礼を述べ、とぼとぼと寺を出てゆきました。

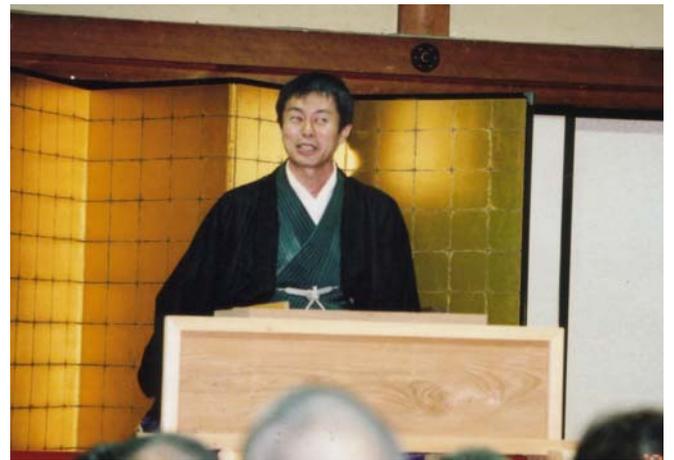
やがて、娘の百カ日の法要を親戚一堂集まって行っている日に、家の門口に念仏を唱える修行僧の姿があったのでどうぞ仏前でお経をあげてやっただされと家の者が招きいれると、両親に内々に伝えたいことがあるといいます。両親を前にその修行僧が「旅から旅への修行の旅の道中、夕暮れ近くに箱根の関所をこえ地獄谷に差し掛かった頃には真っ黒な闇、この夜はここで一夜を過ごそうと思っていると、青い炎と共に娘の泣き声が何処からともなく聞こえてきて、やがてやつれた血みどろの娘が現れ、「私は両親を残して死にました故、地獄に落ちて様々な責め苦に喘いでおります。どうか両親に渡してください」、手渡されたのが京片袖に帷子に、極楽浄土へいけるよう法華経をあげ、霊場を巡ってお祈りいただき、融通念仏の大悲大慈をもらっていただきたき大念仏寺にそれらの品を納めてほしいというのです。私がわかったと伝えると得心したように娘の姿が消えました。」と言い、それらの品を両親の前に並べました。両親は娘の片袖をみて青ざめ、「娘があなたさまを見込んでお願いしたのでしょ、どうか娘が成仏できるように霊場を巡り大念佛寺に納めてやっただされ」と頼み、六百両を差し出しました。

その大金を懐に修行僧は大和と大坂をつなぐ暗がり峠を超えた小屋に走りこむと、首尾はどうであったと訪ねる男の姿がありました。その男こそが若侍になりすまし

墓場から遺体を暴き片袖や帷子を剥ぎ取り、もう一人の男が百カ日の法要の日に、修行僧に扮して両親の前に娘の片袖などを並べて成仏しておらぬので霊場をまわってやろうと娘の死を悲しむ両親の悲しみに付け込んで大金をせしめた二人組みの悪党でした。そして悪党二人が「一仕事終わった」とばかり暗い山道を大阪の色町を目指して歩いてゆきました。翌日、暗がり峠の谷底に、足を踏み外したのか両手を上げてもがき苦しんで息絶えた二人の姿があったそうでございます。人の死や不幸に付け込んで悪事を企てた人間のなれのはての姿でございます。

落語: 「片袖」 落語家 林家染雀 氏

三味線: 山澤由江さん・鳴り物: 林家市楼氏



概要: 床屋に行くのと近くの長屋に住む三杉渡という男がぶらぶらして一日過ごしているが一体何の商売をしているのかと皆で噂話をしていたので、男は直接聞いてみようかと家を訪ねました。三杉は「俺の商売、聞きたいか。それならば、家の中に入れ」と招きいれ扉の掛け金をかけ裏口も閉めて「俺の正体は、盗人じゃ。聞いた限りは外には出さん。横っ腹に風穴あくか、片棒担ぐか、一つに二つや」飛び込んだ男は諦めて盗人の手下になり、先日手伝った住吉町の山之上松兵衛という造り酒屋の十八の一人娘が婚礼を前に根を詰めて嫁入り衣装を仕立てている最中に過労で急死したことや、嘆いた両親が娘を哀れんで嫁入り衣装一式を着せ髪には立派な髪飾りをつけ、300両の大金と共に土葬にしたと三杉に話しました。それならばと、その娘の墓を暴く手伝いをする事になってしまいました。

夜中まで一寝入りした二人は、人気のない阿倍野の墓地にたどり着くと、大騒ぎしながら柵を超え、新墓を暴いて娘の体から着物・簪など金目の物はみんな剥ぎ取って埋め戻して闇の中へ。三杉は手馴れたもので、剥ぎ取った物は500両で売り捌き二人で山分けしました。ただ模様紋付だけは売り捌くと足がつくので押入れの中にしまっていました。片袖だけ丁重に解き放って懐の中に入れて家財一切処分して、娘の百カ日に実家の造り酒屋の前にお六部さんという巡礼姿で米銭を請い歩いた一種の乞食。法華経を六十六部書き写し、日本全国六十六

か国の国々の霊場に一部ずつ奉納してまわったので六十六部とも呼ばれた行脚僧の姿で鉦を鳴らしながら立っていました。驚いて出で来た両親に、見せたいものがあると店の奥にあがり、娘の片袖を二人の前に差し出して、越中立山で修行中に大阪住吉町、山之上松兵衛の娘であるが、両親より先立った不幸の罪に浮かばれないので供養してほしいと訴え、その証拠にと片袖を託されたゆえ今日この家を訪ねたと告げます。その話を聞き、あなた様を見込んでの亡き娘の頼み、50両を供養にと差し出す年老いた父親に、これもお持ちくださいと50両を差し出す母親。男が二人から受取ると、ちょうど家の裏から浄瑠璃のお師匠さんのつまびく三味線の音。「それでは、おいとまいたしましよう」と立ち上がり、「五十両と五十両、合わせて百両。百か日の追善供養お～」と申しますと、ちょ～ど裏のお師匠さんが稽古中とみえまして、チンチン♪と受けてくれましたので、♪あと懇ろ(ねんごろ)に、弔われよ。さらば、さらば(チ・チチン・チンチンチンチン。チチ・チンチン・チンチンチンチン。チン・チン・チン) おおさらば、さらば、さらあ～ば～とお～、見送る涙(チチ・チン・チリチチテン)見返る涙、涙のお～♪ 中庭を下りまして、店の庭までまいりますと結界の内らから、「お六部さん」と声がかかり、男が「おお、番頭か」・・・江戸時代竹本座でたいへんに流行りました文楽の仮名手本忠臣蔵・早野勘平腹切の段最後の数行＝「.....首に掛けたるこの金は、婿と舅の七七日(なななぬか)。四十九日や五十両、合はせて百両百ケ日の追善供養、後懇ろに弔はれよ。さらば、さらば」「おさらば」と、見送る涙見返る涙、涙の浪の立ち帰る、人もはかなき次第なり。をもじった落語「片袖」の幕切れでございます。

講談：「亀鉦のお家騒動」

講談師 旭堂小南陵氏



概要：播州の聖人、教信上人が一回一文の南無阿弥陀仏で寄進された千文の銭で鑄造した叩き鉦を、赤穂領主福原左馬介の家が伝えていました。百七代正親町天皇が見たいとおおせられました。当主は病弱の為、梓新丸君と後見家老、榎影兵部が持参する運びとなりました。こ

の福原左馬介に兄が一人おりました。兄は幼い時に出家し、多々部東海僧部と称していたが、弟が大名で自分が僧侶と言うのは、口惜しい。お家を自分の子にと、もう一人の家老渋川九十九、その弟軍平を味方に付けました。この軍平は、奥女中の浅香に横恋慕。重役会議の席上で軍平が、榎陰兵部の梓多門と浅香が、不義をしていると述べました。よくよく聞くと両名がヒソヒソ話をしているのを目撃しただけの話。そこで亀井太郎と言う忠臣が、立ち話ぐらいで不義とはおかしいと議論になり、亀井は「恋しき浅香殿へ、渋川軍平より」の艶書を拾っていることも暴露。これによって兵部や多門は、その場は切り抜けられました。しかし、いずれ多門に軍平は危害を加えるに違いないと判断した信吉の奥方榎の前と亀井太郎が、多門を逃がしました。先ず浅香の親元、摂津住吉の神官津守之介の下で神官をつとめる山上松太夫の所へ身を隠しました。

兵部、亀井太郎、浅香は弘治2年8月25日赤穂尾崎の浜より調進丸にて出帆。ところが途中で船底から水が浸入。そこへ軍平一味が襲ってきました。浅香は、鉦もろとも海に沈んでしまいました。亀井太郎は、若君を助けて小舟に、兵部は惨殺されました。叩き鉦を失った左馬介は切腹して朝廷に申し開きをします。

亀井太郎は、赤穂へ密かに帰り榎の前を山上松太夫のところへ逃がし、自らは女房咲枝と共に若君を守って旅にでます。三人とも巡礼姿となり、亀井太郎の伯父加盟將軍監清宗を頼って信濃の山の中で悪漢に出会い咲枝はさらわれてしまいました。亀井と若君は、咲枝をさがし、また亀井將監を探しながら信州をさまよいます。咲枝は山中で、善光寺詣の尼ヶ崎の大工与六に助けられて、尼崎へ行きます。亀井と若君は、巡礼姿で武蔵、相模、鉾根を流浪。箱根の山中で野宿したところは、名も六道の辻という場所でした。太郎の前に姿を現したのが、浅香の幽霊。「鉦もあなたの手に戻るであろう。住之江の里に住む多門を訪ねよ」と伝えて片袖をちぎって渡したのでした。時に弘治3年9月下旬のことでした。

住之江に行く途中、桑名で武士に因縁をつけられている父娘に出会いますが、これこそ伯父の亀井將監であり娘榎子と共に京へ帰る途中の災難でした。太郎が助太刀をしてその場を納めましたが、將監は今では禁裏南面の武士となっていました。京都へ行き若君を伯父に預けると国の様子を探る為播州へ。尼ヶ崎に差し掛かった時に妻の咲枝に出くわします。三人で話す内、この与平の正体は豊後大友家の浪人、磯端興六之丞。ご殿女中の花子と不義逐電。生まれた子が咲枝であった。お静と名付けたが。播磨路の正義の駅で花子が死に赤穂の家中町で捨て子をしたのだという。咲枝の二の腕の星のような三つの痣でお静と分かったのでした。

この与平が、渋川九十九に頼まれて調進丸の船底に穴を空けたのでした。彼は責任をとって切腹。よろよろと大物の裏に入水。「竜神よ。首尾よく太郎に名鉦を受けたまえ」と願ったのでした。すると一匹の大亀があの名

鉦を乗せて上がってきたのを見届けて与平は息絶えてしまいました。

亀井太郎は、咲枝を尼ヶ崎に残し、名鐘と片袖を持って住吉へ行くと、多門が二代目山上松太夫となっていました。すでに東海は環俗し福原左馬介信高と名乗り、渋川九十九は、城代家老になっていることを知りました。多門は、亀井将監を頼り、若君に名鉦を持たせて一條大納言の元へ。大納言に口添えをしてもらい福原家の再興に取り掛かりました。

足利義治十二代将軍も調べに関心を示し、信高には切腹を命じました。福原信丸は、足利の旗本に、亀井太郎も足利の直参になりましたが、家の再興は叶いませんでした。二代目山上松太夫は、櫛の前をなぐさめ、自分の頼み寺にしている平野大念佛寺で、櫛の前を尼にして、そして名鉦と紫曙染の片袖も奉納しました。櫛の前は、貞貞尼に、そして秀吉の代に福原信丸は、朝鮮の役の功により九州でいささかの家名を残したということです。

※ 旭堂小南陵氏が、平成 18 年 8 月 18 日に「旭堂南陵」を襲名されました。

宝物館で片袖に幽霊の掛軸 12 幅を見学



もおなじみの「殺しの場」である。

平知盛亡霊：壇ノ浦に沈んだ平家の亡霊が、源義経の海路を妨げたとする怪異は、謡曲『船弁慶』などでよく知られている。波間にたたずむ平家の武将・平知盛の足下には恨みの形相凄まじい平家蟹が描き添えられている。

姑捕鳥図：産死した女性の霊が化かすという「うぶめ」の怪。物言わぬ赤子の表情と無念さを滲ませる女性表情の対比が不気味さを感じさせる。

菅公怨霊図：菅原道真公は、無実の罪で九州大宰府に流されたあげく憤死した。その怨念は雷神と化して平安京に来襲、多くの貴族を取り殺したため、御霊として祀られることになった。地球儀のかたわらに、衣冠束帯の学匠姿で立ち尽くす本図の菅公は、怒りをジッと押し殺しているかのようである。

更屋敷お菊亡霊図：家宝の絵皿をこわしたとしてお手打に遭い、井戸に投げ込まれた腰元お菊の哀話は、いわゆる更屋敷怪談として全国に分布している。北斎をはじめ多くの絵師が手がけている画題だが、青絵の皿を両袖で揚げたポーズと容貌は、独創的というほかはない。

囲碁師亡霊図：黒白の碁石が散乱する碁盤の下から、血まみれの座頭が化けて出る光景を描く。囲碁の勝負をめぐるいざごさから、囲碁師が藩主に切り殺される一幕に始まっていたことを想起させるような図である。

仙台高尾亡霊図：仙台侯伊達綱宗の意に逆らった遊女・高尾は、隅田川に浮かぶ屋形船の中で惨殺される・・・怪火とともに川面にただよう遊女の怨霊の、陰しい顔つきが印象的。

小幡小平次亡霊図：奥州安積沼で夜釣の最中、妻と密通する友人に襲われ水底に葬られた旅役者、小幡小平次の亡霊が、どこまでも妻と友人につきまとい、悩まし、そして最後には二人ともにとり殺してしまう物語は陰惨である。

笑い般若図：亡者の印である三角巾を額につけた老人が、屋根の上に腰をかけて、謎めいた笑いを浮かべている。中有＝死後四十九日の間、死者の魂は、家屋の棟にとどまるという俗説を描いたものだろうか。

柳の下幽霊図：「柳と幽霊」という日本的な幽霊画で、強風になびきさわぐ背後の柳の枝と亡霊の蓬髪が一体化したような効果をあげ、うらめしげな表情がなんとも不気味である。

野晒しの図：「野晒し」とは風雨にさらされて白茶けた頭骨。どんなに華やかな人生であっても、その終末は死であり、到達するところは無であしかないと示す。

佐倉宗吾怨霊図：佐倉宗吾は、下総（千葉県）に伝わる義民伝説の主人公。領主の悪政を將軍家に直訴したため、妻子とともにはりつけの刑に処された。幽霊の肩先に無残な切り口が見える。



幽霊の掛軸は毎年 8 月第四日曜日のみ一般公開
大念佛寺 ☎06-6791-0026

当日運営：池崎宗男・大森史子・北村千代江・北原祥三・森川千世子・米川俊信・原田彰子 写真：杉山英三

一般：玉柏明德・難波りんご・猪岡あぐり・有本壽・門山幸子・蔵楽知昭・蔵落恭子・広淵耕一・広淵智子・広淵宏子・谷芳彦・菊地正喜・菊地敬子・宗野光政・前窪幸代・秋元富範・菅原由美・後藤由利子・藤井実造・大利忠・坂本京子・吉村譽子・桜井康司・桜井佐知子・北村敏明・池崎敬子・平野裕・平野洋子・木全正義・西田甲江子・坂本フジエ・今出三十栄・大崎敏雄・田中史織・池沢一郎・井坂君江・保田ハナエ・中野治郎・北垣瞳・西口和久・西口良子・米谷喜一・米谷キミエ・島野渉・田宮常好・枝松緑・樋口佳子・肥田頼子
学生：青山知弘・青田遊・南都陽子・高木美紀・中村文香・島野佐耶・原久美子・中村まさき
塾生：秋山建人・池崎宗男・北原祥三・北村千代江・柄谷宗子・小林伊一・小林和子・谷福江・田中捻三・杉山英三・下野譲・原季美子・中村孝夫・森欣子・東口恵子・原田彰子・大森史子・深堀正晶・堀内紀江・森川千世子・村上蕪芳・米川敏信（敬称略）